

比島ボルネオ通信兵

幸運の生還

兵庫県 和田 作太郎

私は大正十一年四月十八日、農家の三男として生まれたが、長兄は昭和十四年、北支那で戦死、次兄は病死、父は年配であったので農家の手伝いをしていた。

一時、家のことは兄にまかせて外に出て働いたのだが、その兄が戦死となったため家に帰ったのであった。

現役の仲間たちは入営していたので、いつか私にも召集がと思っていた昭和十八年五月、教育召集令状が来て鳥取連隊の通信中隊（有線班）へ入隊となった。

軍隊手帳には、昭和十八年五月一日教育召集のため中部第四七部隊中鳥隊に応召、同年七月二十九日召集解除と書かれている。三カ月間の教育が終了して、家で農業の手伝いを一年間していたが、戦況も段々と厳し

くなってきており、年配の人々も召集されている。こんな状況だからいつか私にも令状が来るのではないかと覚悟をしていたが、十九年七月二十七日臨時召集令が来て、中部第四八部隊（岡山）に応召、同原隊に編入された。

一年前の教育召集では、鳥取の砂丘で電線を巻いたのを背負って線を引っ張った。砂丘の中の水分のある所を走りながら探して金の棒を建てるのだから、足がなかなか進まない。同じ百メートル走っても普通の練兵場を走るよりはるかにしんどかった。

その時は、一般教練はほとんどなく、わずかに基礎的なものだけで、手旗信号やモールス信号を覚えた。

「イトー、ロジョー、ハーモニカ……」。内務班では私的制裁はあまり受けなかった。軍隊で楽なものは一に通信、二にラッパ……」等と言われたから一般兵よりは楽であったのだろう。

私は特に真面目にやっていたので認められていたようであったが、一期の検閲の時、菜莢を演習場に落とすってしまった。その時、中隊長も一緒に一緒になって捜して

くれた。本来なら、相当強く制裁されるのだが、仲間の前で模範を示したこともあり、大目に見てもらえたのかもしれない。また、幹部候補生を受けようとしていたから特に目をかけてくれたのかもしれない。しかし、その時は教育召集であったので幹部は受けられなかった。

しかし、今度は臨時召集であるから一週間程度下関におり、八月六日、補充要員として、岡第一六〇一部隊転属のため岡山港を出港し、八月十九日門司港出帆、九月十一日、フィリピンの北サンフェルナンド港に上陸することができた。その間の状況は次の如くであった。

輸送船は四千〜五千トン級の「越海丸」であり、補充要員は一個中隊二〇〇人ぐらいだったか（古参兵を含め）、輸送指揮の将校、下士官も一緒であった。

門司を出港する時、中国大陸の方から何機かの敵爆撃機B29が内地へ行ったので、護衛艦が高射砲（高角砲？）を撃った。飛行機の下で炸裂していたが、敵機の編隊は我々船団を爆撃することもなく飛んでいっ

た。恐らく内地爆撃が目的ゆえ、相手にしなかったであろう。

一週間で台湾基隆二泊、高雄二泊、その間港に停泊中爆撃を受け、爆弾は三〇メートルぐらい先に落ち、船は大揺れだったが被害は無かった。高雄の防空隊からは高射機関砲や機銃から曳光弾を撃っていた。敵が何機か撃墜された。船団は十隻ぐらいだったが、直接被害は無かった。

次にバシー海峡では潜水艦の攻撃を受けた。敵潜水艦は昼はおとなしいが、夜浮上して魚雷を発射する。我々は救命胴衣を着けて甲板にいたが、竹の棒が浮き代わりに積んであった。敵潜水艦は航跡で判る。今度はこちらの船がやられると観念していたら船尾スレスレに通過し他の船が轟沈した。「満州丸」という大きな船であった。火柱・水柱が上がる。人もろともわずかの時間で沈んでしまった。我が船の隣を航行していた輸送船である。

以上のような状況で、我が「越海丸」は北サンフェルナンドへ我々を無事輸送してくれたが、その後「越

海丸」はマニラ湾で沈められたと聞いた。今思えば、十九年の九月頃という危険な時期によくぞ無傷で比島まで輸送されたと、その幸運を感謝している。

上陸日の九月十一日、我々は南方総軍司令部へ転属を命ぜられ、北サンフェルナンドから無蓋列車の床に背のうを敷いて南下しマニラへと出発した。一カ月間マニラで防空壕に弾薬等を運ぶ作業を、台湾の高砂族の人と一緒にした。高砂族の人々はしつかりしていて、高砂隊には関心したものである。

マニラで司令官の訓辞中に「毒ガス」の声で敵の大空襲を知った。随分多くの飛行機が墜落したのを目撃したり、頭上のドラム缶の爆発音が一日中聞こえており、空襲の被害の大きさを知らされた。聞くところによると、バシー海峡では多くの被害が出て北サンフェルナンドへ着いたのは二割ぐらいだったそうである。沈没した船の兵隊も北サンフェルナンドへ救助されたという。その兵隊から直接聞いた話では、船が沈没して海へ投げ出され漂流していて助かったという。我々

の「越海丸」にあの時、あの魚雷が当たっていたら、同じ運命だったと思った。二〇パーセントの確率で助かったのだからである。

十月十七日、マニラを発って北ボルネオのアピー港に上陸したら、我々部隊の者は「レイテの敗残兵が来た」と言われた。私の持っていた三八式歩兵銃の菊の紋章は削ってあった。中学校や大学にあった教練用の銃を集め岡山で受領したのである。

十月二十四日、独立混成第五六旅団が仮編成され、同日同旅団に転属したのだが、その時は岡山から一緒に来た同僚は一人もいなかった。思えば、十七日マニラを出る時、自動車を運転出来る者は強制的に残された。それはマニラ防衛のためである。我が軍はレイテで敗れ、その後米軍が大挙してルソンに上陸して来たのであるから、私は命拾いをしたことになる。ルソンには第十師団の満州から来た鉄兵団の人も随分いた。我々の同郷の人がいたわけだ。その時、その人達と直接話をする機会はなかったのだが、同郷の多くの人が、フィリピンのルソン島で戦没しているのだから、

私はこの時も連良く生き残れたのである。

十一月四日、北ボルネオ、アピー港を海軍の船に便乗出発した。当時は制海・空権は日本軍には無かったので船は陸地に平行して航行したのだが、私が立哨していた真昼間、船の五〇メートル先に潜水艦の潜望鏡が出て来た。私は「潜望鏡」と叫ぶと、海軍は直ちに射撃した。潜水艦は沈んで姿を見せなかった。弾は舷側をすれすれに撃ったし、その後爆雷も投下した。鼓膜が破れる程の大きな音であった。

十一月七日、ボルネオ東海州タワオ港に上陸。十五日、独立混成第五六旅団編成完結し独立歩兵第三六九大隊に編入、タワオ付近の警備に就いた。付近は農業地帯で、タビオカが沢山作ってあり、それを食べたが、当時は食物が無かったので美味しく感じ、パイアの熟した実は美味であった。付近の治安は良かったので地上や海上からの攻撃はほとんど無かった。

昭和二十年二月六日、タワオ港出発、同日第二二特別根拠地隊司令官（海軍）の指揮下に入った。すぐに

空襲を受けたが、我々はお客さんの様にして船室にいた。海軍は高角砲などを撃ち、戦闘は一時間ぐらい続いた。敵機の攻撃は主に機銃掃射らしく、船倉の我々は割合に安全であった。しかし、海軍の兵は負傷し血だらけになって運び込まれて来た。

この様子を見て、タワオで糧秣受領の時、敵機の機銃掃射を受け、椰子の木を盾にしてくるくる回って避けたことを思い出した。弾が幹に当たればこちらはやられる。恐ろしいもので身の置き所に苦しんだ。その時は四、五人での糧秣受領なので、皆が逃げまどったものである。飛行機は低空だから我々を見ている。我々は無抵抗だから、敵戦闘機は狩りの獲物を撃つように面白半分撃っているようだ。遮蔽物が無いのだから撃たれる方は心理的にまいってしまう。

翌二月七日、バリックパン港上陸、ここは油田地帯であるから、近くに油田の櫓が林立し、建物も油田関係のものであったらしい。二月十一日、出発したが、その後バリックパンに敵が上陸したと聞いた。マニラでもバリックパンでも我々は命拾いをしたの

である。

二月十二日、南ボルネオ、パンジェルマシオン上陸、同地付近の警備。私はバリックパパンの時からマラリア熱にやられ、そこを出発する時、「残れ」と言われたが「本隊と一緒に行く」といってパンジェルマシオンに着いた。毎日三十九度の熱が何十日も続いた悪性のものであり、仲間は随分死んだ。その後「明日は和田の茶毘だ」と言われているうちに、病院も爆撃の目標となっていた。寝ていると屋根から寝台のところへと機銃掃射をしてきて、私の体を挟んで弾の穴（弾痕）が開いた。ここでも私は命拾いしたのである。その時、マラリアで入院中の戦友も随分死んだ。

六月九日、パンジェルマシオンを出港、その時も病院で「和田、お前は残れ」と言われたが「本隊と一緒に行かせてくれ」と言っただけでジャワに行った。

六月十二日、ジャワのスラバヤに上陸し、部隊に復帰することができた。それからは病気の方も割合良くなった。ボルネオは物資が不足していたが、ジャワは環境も良く、「酒保」には菓子なども随分あって、逆

に現地人に分けてやったものである。

北ボルネオは当時英領であって、南は和蘭領であり、南の方が良かった。

七月六日、スラバヤ発鉄道で、七月七日、ジャカルタ着。七月十二日、ジャカルタ発、十八日、パンカ島（ジャワの西北・スマトラ島東北）→パレンパンの沖のドバリ港上陸。

七月二十三日、ドバリ発、二十六日、ヒリトン島（ドバリと北ボルネオとの中間→ジャワ海の真ん中）のシングル港に上陸し、独立混成第七一旅団の指揮下に入る。

八月三日、シングル港を出発した。私は通信隊で暗号班になったが、中等学校出の者や通信省関係者で編成されていた。乱数は四桁であり、一個分隊十人余りで暗号班が編成された。私は大隊本部勤務の独立歩兵第三六九大隊の時から、乱数表は絶対にはなからぬと徹底的に教育されていた（ミッドウェー海戦の敗因は、沈没艦艇を引き揚げ、日本海軍の暗号書を米軍が解読したため、日本軍の命令その他が米軍に判つ

てしまっていたことだという。

通信には戦況が判る。無線兵には電文の内容は判らぬが、暗号解読により初めて判るのである。従って暗号兵はその内容を他に漏らすことは出来ず直接将校に渡すのである。この頃、だいぶ戦況は判った。敵艦がどこそこへ現れたとか、被害程度も判る。命令の内容も判る。班長は下士官で、班員は私を含め十人であった。

八月十一日、南ボルネオ、ボンチャナック港上陸、部隊はバラバラになっていて、本部は早いから十一日で、我々は十五日だった。その後、島に取り残された中隊も多く、終戦まで会えなかった人、戦後も会えぬ人がたくさんいて、人名も判らぬから、今は二人程度の戦友と交流しているだけである。

十五日に上陸して終戦が判った。日本が負けたので貯金通帳や操典類も河に捨ててしまった。そのため後に野戦郵便局が開設されたので、友人の通帳に貯金したが、それらの人々の大部分は連絡がとれず困った。神戸の人だけが旧円を工面して新円に替えて送金して

くれ感謝している。

話を元に戻すが、八月十八日、ボンチャナック出発、敗戦は知ったが何の命令も無いので、前からの所定の命で出発したのであるという。途中で赤道標があり「今赤道を通過」と言ったのが、よい思い出である。何度も赤道を通過したのだが、「赤道」とはつきり標示された所はそこだけで、良い体験と思っている。

九月一日、陸軍上等兵、九月八日、北ボルネオ、クチン州パウ山着。その間、入れ墨した現地人を雇い、荷物を持たせて行軍したが、お礼に「銃をくれ」と言われたが、危険であるのでやらなかった。

今でも印象に残っていることは、人と優しく接した所は対日感情が良いということだ。また行軍中、学校の生徒が、我々の休んでいる所へ先生を連れて来て「勝って来るぞと勇ましく……」との歌を歌ってくれたのには涙が出た。フィリピンの治安は悪かった。米国の統治領だったのだからかもしれないが、南ボルネオの人は良かった。負けてからも割合に親切にしてくれ

た。

十二月十日、パウ出発、北ボルネオの山脈を越えて行ったが、日本鉱山関係の集落があり、我々一個班が先遣し、輸送等にトロッコを使用することも出来た。

部隊は近くにあった半径一キロメートルほどの湖の畔で集結し、そこで自発的武装解除をし、武器類はその湖に沈めた。

大隊長は若い現役の少佐であった。そこに駐屯するにも宿舎はなく（我々先遣隊は民家にいたが）、木を集め大工経験者に仮宿舎を造らせ、部隊は約三カ月間いた。十二月にパウを出発した時、住民が日本が負けたのを知っていて、物を買おうとしたら莫大な軍票を要求され、立腹した戦友を「軍票は価値がないのだから」と、悔しいがなだめたことを思い出す。

パウからワニのいる河を下り、何百匹かの猿が騒いでいる中をクチンに着いた。クチンは北ボルネオの首都のような所で、河の向こうには宮殿のような立派な建物が建っていた。

いよいよ、連合軍の豪州兵が我々一人一人を調べる

ことになった。銃口を突き付けられ、貴重品（私は時計二個）を取られてしまった。収容所まで行進したが、収容所には鉄條網が張り巡らされていた。ここは日本軍の捕虜収容所であったという。今や立場が逆転したわけである。

正面を入ると大きな木柱がある。たしか、「菅大佐自刃の地」である。大佐は収容所長として責任を取ったと聞いている。収容所では戦犯容疑者を見付けるため、現地人が「面通し」をする。うっかり間違えられたらかなわんと思った。無実の罪で死刑になった人も随分いたろう。言い訳が通らぬのだから情けない、勝者が敗者を裁くのであるから。

収容所には食堂もない。正月の御馳走が薄味味噌汁にさつま芋にさつま芋の葉、飯は無く、水のようなお粥が飯盒の中盒にあった程度である。こんな所に一週間もいたら参ってしまう。その後、豪州兵から印度兵に代わり、私は本部詰めであったので印度兵が自分の弁当を分けてくれ、何とか栄養失調を免れたが、二カ月間で十何キロも体重が減ってしまった。マラリアは

その後出なかつたし、伝染病も本部要員からは出なかつた。

私の部隊は各中隊ごとに島に残っていたので、四カ月後に遅れて帰った人もおり、私の家へ同郷の人の家族が問い合わせて来たりした。二月十三日、クチン発、内地は物が無いからと言われたので靴下に外米を四〇五合詰めて帰った。船は日本の大和丸という。私が戦中移動の時に乗ったことのある大きな船であつた。

三月九日、大竹着、十日自宅へ帰る。山陽線で広島の際爆による焼け跡を見、姫路の街は丸焼けでお城だけは焼けずにあつた。近所の人が焚火をしてくれ暖をとることが出来た。家族は皆元気でいたが、何の知らせもなく突然帰つたので皆驚いた。途中、自転車に乗つた村長と会い「和田君帰つたか」と言われた。その後は農業で、結婚は二十四年にした。私は戦地でも、幸運の連続があつて生還出来たのである。

昭和五十三年頃、フィリピンのマニラへ行った。当時の宿舎だった小学校へは行かなかつたが、町並みは

大して変わっていないなかつた。前にも申した通り通信隊は戦友があまりいない。岡山に二人、相生一人ぐらいしかいない。フィピンでの戦没者は地域的に言つても一番多く、軍官民合わせて五十一万八千人というところである。また末期のボルネオでも二万人近い方が亡くなつている。幸運と不運の橋を渡り歩いて帰れたことに感謝している今日この頃である。

南方 第二十一海軍通信隊

福岡県 渡辺 宣明

昭和十五年、志願した予科練に入隊が決定して、昭和十七年に入隊した。私は大正十五年三月十日、福岡県京都郡遅川町に生まれた。本来の現役であれば大正十五年生まれは、ほとんどの人が軍隊に入っていない。大正十四年生まれの人が、前年生まれの大正十三年の人と一緒の年に（十九年と二十年徴集兵）入営し、十五年は志願兵以外は兵籍の無い者が多い。